依他起性における雑染と清浄の問題

高岡善彦

目次

はじめに
第一章　『摂大乗論』における三性教学の発展
第一節　依他起性概念の発展
第二節　「二分依他」思想の誕生
第三節　転依と意言と聞熏習
第二章　初期唯識経論における萌芽的な諸思想
第一節　十二支縁起と虚妄分別
第二節　密意による二分依他の思想
第三節　原初的な転依の思想
第三章　『唯識三十頌』における識転変と思想の深化
第一節　識転変における依他起性の意義
第二節　「空即真如」と「二空所顕の真如」
第三節　転依の「四種八義」と五事
むすび

はじめに

唯識学派において説かれる依他起性は、雑染への方向性と清浄への可能性をあわせもっている。小論は「依他起性における雑染と清浄の問題」を検討することにより、唯識教学を三性説という側面から研究しようと考える。

着眼点は三つある。第一は依他起性の概念とその変遷である。第二は雑染と清浄に関する思想の発展である。第三は三性説に関する教学の骨格となる「転依思想」の研究である。三性説に関しては『摂大乗論』（以下『摂論』）における教義の発展がめざましい。『摂論』は三性説について新しい思想を次々に生みだしたのである。

本論ではまず依他起性にかかわる『摂論』の思想の全体像をまとめることに努めた。そして『摂論』と対比することにより、それ以前の初期唯識経論が説く依他起性の思想を検討した。これらの経論には、『摂論』が述べる全体像の一部が明かされていたり、未成熟な段階の概念が説かれている。それらを個々に検討して思想発展の過程をたどった。最後に前述の三つの着眼点を中心に、『三十頌』とその安慧釈および『成論』における思想が、『摂論』の思想を超えて教学をどのように発展させたかを検討した。

第一章　『摂大乗論』における三性教学の発展

まず依他起性の概念につき、『摂論』はさまざまな角度から論述するが、小論ではそれを次の四項目に整理した。

［第一］　阿頼耶識ヲ為シ種子ト。虚妄分別ニ所レタル攝セ諸識ナリ。（大正31・137c～138a）

［第二］　從リ自ノ熏習種子ニ所レ生ゼ。依リテ他ノ縁ニ起ルガ故ニ

名ニク依他起ト。（大正31・139a）

［第三］生ゼル刹那ノ後ハ無下キガ有ニリテ功能ト自然ニ住上スルコト故ニ名ニク依他起ト。（大正31・139a）

［第四］依レリテ他ニ雑染ト清浄トノ性トシテハ不レルガ成ゼ故ナリ。（大正31・139c）

依他起性の雑染と清浄につき、『摂論』所知相分第三は二分依他といわれる思想を説く。『阿毘達磨大乗経』において、諸法には雑染分と清浄分と彼の二分があると明かされるが、無著はそれを仏の密意として、雑染分を遍計所執性に清浄分を円成実性に、そして彼の二分を依他起性に相配した。

依他起性が浄化されるときその本質が清浄の円成実性に帰着することは、唯識思想の前提となっている。しかし、初期唯識経論では依他起性自体が清浄なる性質を有することは、まだ明確には説かれていない。浄分依他の思想は『摂論』によってはじめて明確に規定されたのである。

『摂論』果断分第十は二分依他の思想にもとづいて転依を定義する。転依とは二障が断除されて、依他起性が雑染分を転捨し、清浄分を転得することである。転依がはじめて依他起性の雑染と清浄、すなわち二分依他の思想と不可分な形で説かれたのである。『摂論』ではこの転依に六種あることを明かす。それらは「損力益能転」・「通達転」・「修習転」・「果円満転」・「下劣転」・「広大転」といわれる。

実践面から転依への悟入について入所知相分第四は「聞熏習」と「意言」という思想を開示する。聞熏習は所知依分第一で「是れ出世間なる最清浄法界より等流せる性の故に、是れ世間と雖も、而も是れ出世心の種子の性なり」（大正31・136c）と説かれる。「等流」とは、仏陀の説法が法界から流れ出るごとくにあることをさすのであり、流れ出たものはすなわち経などの十二部教である。

転依の最大の要因は仏所説の正法を聞くこと、すなわち聞熏習である。「意言」とは明瞭な形の分別や判断の前段階、概念化される以前の段階の心中におこるある種の理解をさす。唯識の教えを聞くがまだ転依にはいたらない心の奥底での味わいである。そしてこの「意言」が、悟りへの踏み台となり、転依をおこす転機を与えるのである。

第二章　初期唯識経論における萌芽的な諸思想

『摂論』以前の唯識経論をここでは「初期唯識」経論とよび、その中から『解深密経』（『深密経』）・『瑜伽師地論』（『瑜伽論』）・『大乗荘厳経論』（『荘厳論』）・『弁中辺論』（『中辺論』）を取りあげて依他起性の雑染と清浄の問題を検討する。

初期唯識経論における依他起性の概念を、『摂論』における四項目の概念と対比した。『深密経』と『瑜伽論』ではこの四項目の内、第二項の縁生に言及するのみで、他の三項目にはふれていない。第二項の中でも「十二支縁起」による縁生を述べるのみで、「熏習種

子」に言及するものではない。『深密経』と『瑜伽論』における依他起性の概念は、『摂論』と比較すると極めて原初的な概念にとどまっていることが分かる。

『荘厳論』と『中辺論』の依他起性は虚妄分別とされているが、これは第一項目について言及するのみであって、第二から第四項目にはふれていない。第一項目においても「虚妄分別所レ(ニ)レタルセ(ナリ)摂諸識」に該当するにとどまり、「阿頼耶識為二種子一(ヲス)(ト)」には言及されていない。『荘厳論』と『中辺論』における依他起性の概念もなお発展途上の概念である。

『摂論』の二分依他との関連で初期唯識経論を検討すると、『深密経』では二分依他の思想誕生をうながす問題意識が認められ、『瑜伽論』においても同様に二分依他に結びつく思想の芽ばえがみられる。しかし、両書ともに依他起性は基本的にはなお雑染の性格を強くもっている。『荘厳論』では清浄の依他起は言及されず、二分依他的な思想はみられない。『中辺論』では虚妄分別という概念の中に、雑染性と清浄性という概念が読み込まれている。これらの初期唯識経論では『摂論』が説く二分依他の思想は明確な形では明かされていないが、二分依他の思想につながる概念の萌芽が存在することも否定できない。密意によって二分依他を示唆していたというのが適当な表現であろう。

『深密経』や『瑜伽論』においては、唯識教義の特徴とされる転依の思想がすでに明かされている。さらに『荘厳論』において転依の思想は二障の断滅という形でより具体的に述べられている。しかし、初期唯識経論においては、『摂論』のように六種転依や意言・聞熏習という成熟した形で転依が説かれることはなかった。

第三章　『唯識三十頌』における識転変と思想の深化

ここでは『三十頌』を中心に、その安慧釈と『成論』を参考にして、『摂論』以降の依他起性の雑染と清浄の問題を考察した。

『三十頌』において三性の概念は識転変という新しい思想のもとに構築された。これは『摂論』における依他起性概念の四項目にはみられない新機軸であり、教学の発展である。一方、識転変と三性の関係については、安慧と護法の間に教学上大きなくい違いがある。安慧において識転変は「妄分別」であり能縁であり、これが依他起性であるとされる。護法においては、八識の識体と相・見二分が依他起性と名づけられる。この教学上の差異は現代の学界においてもなお議論をよんでいる。

『三十頌』は『摂論』の二分依他の思想を継承しながら、依他起性の雑染と清浄を論じる。ここで浄分の依他としての「正智」すなわち無漏有為が依他起性にあたることは疑いない。それをふまえながらなお安慧と護法では教学の違いが生まれている。それは無漏有為としての正智と、無為の真如が同一次元にあって互いに融即するかどうかの違いである。安慧は互いに融即すると説き、「空即真如」の立場であった。一方、護法では両者は異次元にあると考え、これ

ら二つが融じあうことのない「二空所顕の真如」の立場をとっている。いずれの立場に立っても、『三十頌』は『摂論』の思索をさらに進め、より深い思想としての完成度を高めた。

『成論』巻十は転依の「四種八義」を説く。四種転依とは「能転道」「所転依」「所転捨」「所転得」の四つをいい、それぞれが二義をもっているので、「八義」といわれる。『成論』は『摂論』の六種転依をふまえたうえで「四種八義」の転依を説いており、『成論』の思想は教学的完成度が高い。しかし、転依をもたらす要因としての意言や聞熏習にはあまり言及しない。意言・聞熏習は他の論書にはほとんどみられない『摂論』に特徴的な優れた教義である。一方、『摂論』は五事にはほとんど言及せず、正智、真如の相配については全くふれていない。『成論』において五事は重要な教義とされ、『瑜伽論』にさかのぼり会通して教学の統括をはかっている。

むすび

『摂論』は依他起性の概念をいくつかの角度から説くが、本論ではそれを四項目に整理し、これと対比しながら、初期唯識経論および『三十頌』に説かれる依他起性の概念を検討した。

依他起性の雑染と清浄の問題について、『摂論』は二分依他という思想を明確にした。ここでも二分依他と対比しながら、初期唯識経論および『三十頌』における雑染と清浄の思想を研究した。

転依は『摂論』においてはじめて二分依他と不可分な形で説かれ、転依を誘発する要因として意言や聞熏習等の思想が説かれた。これに対して、初期唯識経論における思想の完成度はなお低い。一方、『成論』は「四種八義」の転依を説くが、これの教学的完成度は高く『摂論』の思想を一層発展させた。

小論は依他起性を通じて、インドにおける唯識思想の発展と、教学組織化の過程を、いくつかの側面から明らかにすることができた。